

平成24年 第19回

東京都教育委員会定例会会議録

日 時：平成24年11月22日（木）午前10時00分

場 所：教育委員会室

平成24年11月22日

## 東京都教育委員会第19回定例会

### 〈議 題〉

#### 1 議 案

第65号議案

平成24年度東京都公立学校長等任用審査について

第66号議案及び第67号議案

東京都公立学校教員等の懲戒処分等について

第68号議案

東京都教育委員会委員の辞職の同意について

#### 2 報 告 事 項

- (1) 平成24年度「児童・生徒の学力向上を図るための調査」（東京都独自の調査）結果について
- (2) 平成24年度東京都教育委員会職員表彰について
- (3) 平成24年度東京都教育委員会事業貢献企業等に対する表彰について
- (4) 学校外からの校長任用に係る特別選考の実施結果について

委員 長	木 村 孟
委 員	内 館 牧 子
委 員	竹 花 豊
委 員	瀬 古 利 彦
委 員	川 淵 三 郎
委 員	比留間 英 人

事務局（説明員）	教育長（再掲）	比留間 英 人
	次長	庄 司 貞 夫
	理事	高 野 敬 三
	総務部長	松 山 英 幸
	都立学校教育部長	直 原 裕
	地域教育支援部長	谷 島 明 彦
	指導部長	坂 本 和 良
	人事部長	岡 崎 義 隆
	福利厚生部長	前 田 哲
	教育政策担当部長	白 川 敦
	特別支援教育推進担当部長	廣 瀬 丈 久
	人事企画担当部長	加 藤 裕 之
（書 記）	総務部教育政策課長	八 田 和 嗣

## 開 会 ・ 点 呼 ・ 取 材 ・ 傍 聴

【委員長】 ただいまから、平成24年第19回定例会を開会します。

傍聴関係です。個人は、合計6名からの傍聴の申込みがありました。許可してよろしゅうございますか。——〈異議なし〉——では、許可いたします。入室してください。

## 会 議 録 署 名 人

【委員長】 本日の会議録署名人は、竹花委員にお願いします。

## 前々回の会議録

【委員長】 前々回10月25日開催の第17回定例会会議録については、先日前配りしまして御覧いただいたと存じますので、よろしければこの場で承認をいただきたいと存じます。よろしゅうございますか。——〈異議なし〉——では、第17回定例会の会議録については、御承認いただきました。

前回11月8日開催の第18回定例会会議録が机上に配布されていますので、次回までに御覧いただき、次回の定例会で御承認をいただきたいと存じます。よろしくお願ひします。

次に、非公開の決定です。本日の教育委員会の議題のうち、第65号議案から第67号議案まで及び報告事項（2）から報告事項（4）までにつきましては、人事等に関する案件ですので非公開としたいと存じますが、よろしゅうございますか。——〈異議なし〉——では、ただいまの件につきまして、そのように取り扱います。

## 報 告

(1) 平成24年度「児童・生徒の学力向上を図るための調査」(東京都独自の調査)結果について

【委員長】 報告事項(1)平成24年度「児童・生徒の学力向上を図るための調査」(東京都独自の調査)の結果について、説明を、指導部長、お願いします。

【指導部長】 報告資料(1)を基に説明します。

過日、国の学力調査に関する報告をしましたが、都独自の学力調査を本年7月に実施しましたので、その結果についての報告を行います。

報告資料(1)の左端に、「1 調査目的」、「2 調査方法・内容」、「3 調査対象学年・実施校数・実施児童・生徒数」、「4 実施日」が並んでいますが、例年どおりですので説明を省略します。

「5 『学力向上を図るための調査』結果の概要」です。「(1)都全体の平均正答率」として、小学校、中学校それぞれの数字が載っています。小学校では社会科と算数、中学校では社会と理科、これらの教科が他の教科に比べて少し低いようですが、単純に平均点だけで比較しても全体は分かりません。(2)と(3)に、それぞれ小・中学校の学習指導要領に関する内容及び都独自に実施している読み解く力に関する内容の観点別調査結果の平均正答率を出してあります。

今回は、参考資料のグラフを用いて全体の様子を詳しく説明します。最初の4枚が小学校の国語、社会、算数、理科、次の5枚が中学校の国語、社会、数学、理科、英語に関する正答数分布のグラフです。グラフの見方として、小学校の国語を使って全体の見方について説明します。小学校の国語では全部で22問、出題しました。その22問の中で、「何問正答した生徒がどのくらいいるか」という割合をグラフ化しました。赤い線で「設定通過率」とあるのは、問題を作成した検討部会が、標準的な授業時間で授業をした場合、「このくらいはできてほしい」という、検討部会が期待する数値として出したものです。それ以外に、平均正答率、設定通過率よりも5パーセント低い線が、全部で3本出ています。なぜ5パーセント低い部分に線を入れてあるかというと、我々が設定した通過率が全体的にふさわしい数字であるかどうか、誤差があるためはつきり分かりません。これまでの研究等の成果を見てもプラスマイナス5パー

セントの幅をもたせてこうしたものを考えた方が良いという結果があるので、私どもとしても、設定した通過率のプラスマイナス5パーセントの幅をもって、おおむね満足した範囲はこのくらい以上だろうと考えています。

また、平均点等では、経年変化等の比較は難しいのですが、設定通過率により設定通過率マイナス5パーセントよりも上位にいる児童・生徒の割合で経年変化を比較することが可能ではないかと考えています。小学校の国語では、設定通過率よりも5パーセント低い幅を持たせた部分で見ると、それを越えている子供の割合が61.5パーセントでした。今年度も同じく61.5パーセントでしたので、国語についてはほぼ同じレベルの実態ではないかと見ています。

小学校の国語については、私どもが考えている設定通過率よりも右側にピークがあります。社会、算数、理科も、小学校については概ね右側にピークが来ており、ほぼ良い状態であると分析しています。

同様に中学校についても、分布の状況、設定通過率、平均正答率を載せてあります。小学校と異なり、中学校では分布に特色が現れています。国語は、かなり右に寄った良い分布になっています。しかし、社会は、ピークが、我々が考えている設定通過率より低くなっており、昨年も初めて分布で示した際も同じような状況でしたが、今回は少し顕著に現れています。

数学については、国の調査の際にも説明し、委員長からも、理数系の教科は積み上げなので分布が広がって台形の形状になることが多いという御説明もいただきました。今回の都の調査においても、数学は台形の形状になっています。

理科についても、社会同様、設定通過率よりも左側に分布のピークがあり、これも昨年と同じ状況です。

英語は、ほぼなだらかな分布になっております。

私どもとしては、設定通過率に幅を持たせたものを基準に掲げ、できるだけ多くの児童・生徒をこれよりも上位に上げるにはどのようにすればいいか、今後も考慮していかなければいけないと考えています。

幅を持たせた設定通過率をクリアした児童・生徒の割合について、小学校の国語は61.5パーセントの児童が達成していましたが、社会と理科は昨年比で上昇しています。

ただ、算数が昨年比で設定通過率よりも上の割合が減っている実態がありました。

また、同様に設定通過率よりも上の割合を見ると、中学校では、社会と英語が昨年よりも少なくなり、国語、数学、理科については昨年よりも上がっているということで、教科によって多少の上下があります。これは昨年と今年の2年間ですので、しばらく状況を把握していき、設定通過率の設定の仕方、児童・生徒の分布状況を詳しく分析しながら、今後、更に生かしていきたいと考えています。

報告資料（1）の1ページにお戻りください。「6 『児童・生徒質問紙調査』結果の概要」です。これは、学力調査を行うだけではなく、児童・生徒と学校への質問紙調査を毎年実施しています。今回、児童・生徒が各教科等の内容について「分かる・どちらかといえば分かる」と回答した割合を、小・中学校ともにこの学力調査を始めた平成16年度からの経年変化を見ています。上が小学校第5学年、下が中学校第2学年ですが、平成16年度当時から比べると右上がりです。小学校については昨年度が最も高くなりました。今年度を見ると、算数は「分かる・どちらかといえば分かる」が上がっていますが、その他の3教科は昨年に比べると少し下がっています。ただ、先ほど説明したように、昨年度に比べて設定通過率よりも上にいる児童の割合は、算数は下がり、残りの教科は上がっていました。ですから、出てきた学力調査の結果と児童の意識が全く逆になっている面があり、これはなぜなのか、子どもはこれから少し丁寧に分析しなければいけないと考えています。

中学校第2学年については、社会と英語が下がり、あとは上がっています。これは、設定通過率を超えた割合と全く一致していて、中学校については生徒の意識と実際の学力調査の結果が一致しているため、小・中学校でなぜ違う結果になったのか、学校からも情報を集めてみたいと考えています。

また、「自分の考えを、整理して分かりやすく説明している」と回答した児童・生徒の割合について調査しました。今回の学習指導要領の改訂では言語活動が重視されていますので、それを実際に児童・生徒は行っているのか、言語活動の設定が学力調査の結果にどのような影響を与えているかを調べました。棒グラフで表わしているとおり、「自分の考えを、整理して分かりやすく説明している」について「している」と回答している児童ほど平均正答率が高くなっています。中学校も同様です。ですから、

児童・生徒自身も意識してこのような学習をしていることが、学力向上には欠かせないことがわかります。

次に、「7 『学校質問紙調査』結果の概要」を御覧ください。学校にも同様に、言語活動の充実を図ったかどうかということで、学校の割合と正答率との関係を探りました。上が小学校ですが、「よく行った」、「どちらかといえば行った」と回答した小学校の割合が、「あまり行っていない」と回答した小学校に比べると高くなっています。中学校について、「よく行った」と回答した学校の正答率が、ずば抜けて高くなっています。

小学校について、「あまり行っていない」と回答した学校は全体の10パーセントにも満たないごく少数ですので、小学校ではこうした言語活動をよく実施していることがわかりますし、それによって正答率を上げていることがわかります。

逆に、中学校は、「よく行った」と回答した学校は4校に1校程度しかありません。「よく行った」学校だけは正答率が上がっており、そうではない4分の3の学校は、それほど平均正答率が伸びていません。この辺は、小学校と中学校の授業の仕方の差が現れているような気がします。このことから、新学習指導要領で求められている言語活動を中学校でもきちんと実施できるような指導を徹底していくことが、東京都の学力向上のために必要になってくると考えています。

以上の結果から、「8 授業改善の視点」として、基礎的・基本的な知識や技能の習得、思考力・判断力・表現力等を育む指導、読み解く力を高める、学習習慣の確立、こうした四つの視点で、今後、学校への指導を推進していきたいと考えています。

また、「9 調査結果に基づく施策」として、学力向上施策検討委員会を現在、設置していますが、そこでの検討を基にした次年度以降の展開、さらに、この結果を多くの教員に知ってもらい、授業を改善してもらいたいということから、こうした説明会を開きたいと思います。また、指導主事が学校訪問をする際も、必ずこの説明を行い、先生方の授業を見直していきたいと考えています。

次に、2ページを御覧ください。全体結果については、今、説明したとおりですが、今回の調査では理科や社会に課題が目立ちましたので、どういうところに学習のつまづきがあるのか、問題を具体的に取り上げて説明したいと思います。



左側に、中学校の社会と小学校の社会を並べてあります。これは、新学習指導要領において、小学校において都道府県の名称と位置をきちんと指導することになったので、地域ごとの都道府県と県庁所在地がどういう位置関係にあるのかをきちんと理解しているかという問題を中学校の生徒に出したのですが、正答率が27.7パーセントで、4人に1人くらいしか正答できませんでした。

これと同様に小学校ではどのようなことを学習しているかということ、東京近県についての学習成果がどの程度現れているかということで問題を出しました。隣接する千葉県、埼玉県、山梨県、神奈川県がどの程度、理解されているかについて問題を作成してみました。これら4県についての情報も、小学校段階であまりよくできておらず、全部解答できた児童は37.2パーセントしかいません。

ですから、小学校段階でこうしたことをきちんと定着させておかないと、中学校でもきちんと学習が定着できていないことがわかりました。

また、資料の右側は、中学校の理科と社会、小学校の算数との関係です。3番にある中学校理科は、力が働く面積と圧力に関する問題です。面積と圧力は反比例の関係にあるという問題ですが、41.5パーセントの正答率でした。

その右側は、水溶液の質量パーセント濃度を求める問題で、生徒にとって一番悩ましい問題となりました。水5グラムの中に3グラムの物質を入れてかき混ぜ加熱して溶かしたとき、濃度は何パーセントになるかという問題ですが、これについては9.3パーセントしか正答がありませんでした。

左下の中学校社会では、日本とニューヨークの時差が何時間あるかを考える問題です。1周360度で24時間である関係から、時差14時間を求めてもらいたかったのですが、正答率は14.8パーセントでした。

これらはどれも、全体と部分との関係や比の関係を理解していれば全て解答できる問題ですが、小学校の算数で、「2リットルのジュースを3等分すると1つ分は何リットルですか」という問題でも、半分以上が正答していないことに、現れていますように、もともとの算数の比や割合についてしっかり学習していないと、理科や社会にも影響してくることが調査結果からもわかりましたので、これも学校側にしっかり伝えていきたいと考えています。

説明は以上です。

【委員長】 ありがとうございます。かなり複雑な数字が並んでいますが、いかがでしょうか。何か御質問、御意見がございますか。

【内館委員】 資料の1枚目の「7 『学校質問紙調査』結果の概要」の「思考力・判断力・表現力等を育むための言語活動の充実を図った」に関しては非常に重要な結果が出ていますが、具体的に「言語活動の充実」とは、どういうことを行ったのでしょうか。

【指導部長】 児童・生徒に、自分が考えていることを実際に言葉で表現させたり、「なぜこのように思ったのか」、理由を言わせたり、他の児童・生徒が発表したことに対して「どう思いますか」というように、必ず自分の意見を言わせるように、また、言うための根拠を示すなどの活動を行っています。学校からは、そのような報告を受けています。

【内館委員】 それを皆の前で発表するわけですか。

【指導部長】 そうです。

【内館委員】 わかりました。

【委員長】 ほかにございますか。どうぞ。

【竹花委員】 昨年度からこういう分布図を作成していただいておりますが、昨年度と今年度を比べて、数字が大幅に改善された区市町村はありますか。

【指導部長】 私どもとしては、個々の自治体ごとに比較はまだしていません。

【竹花委員】 それを科目ごとによく見ていただいて、区市町村の中で顕著に改善されている地域があれば、その理由を確認することが大切だと思いますので、その点での検討を更にお願ひします。

また、学校別の調査結果が各学校にもたらされますか。

【指導部長】 そうです。学校にはデータを全部渡します。

【竹花委員】 各教科の担任は、そのデータを見る機会がありますか。

【指導部長】 その学校の中で、調査を実施した学年の中では細かく見ることになっています。こうしたものを基にして授業改善推進プランを作成しなさいと学校に指示していますので、どのように授業を改善していくかについてまとめることになって

います。

【竹花委員】 わかりました。

どう考えればいいのか難しいところですが、社会科がなぜこういう状況になっているのでしょうか。

【委員長】 私もそう思います。中学校においてはさほどでもないのですが、小学校では大変低いですね。

【川淵委員】 大体、社会科の授業は面白くないからですよ。興味を持って生徒が授業を受ける、授業の仕方によると思います。私も社会科が面白いと思ったことがないです。例えば塾などに行くと、社会科がおもしろいと思っている生徒もいるわけだから、教え方、興味の持たせ方の問題だと思います。

この問題については、私なりに解いてみましたが、結構、難しいものもありました。中学校社会の問題は、完全に記憶の問題ですね。「5 中学校社会」の正答率が14.8パーセントの問題は、過去にこういうことを教えたことがなくて、いきなりこの問題を出して、こういうことに答えられる能力はどの程度あるのかということを見ているのであれば、このくらいの正答率ではないかと思って見ていました。きちんと教えていてこの答えでは問題がありますが、その辺はどういう感じですか。

【指導部長】 きちんと教えて指導しているので、問題として出題しております。

【川淵委員】 それでは成績が悪いということですね。私は、応用問題としてこういう出題をしてみて、どれだけ答えられる能力があるのかを見ているのかと思いましたが、きちんと教えているということであれば、少し寂しい結果ですね。

【指導部長】 解き方として、出題された図のように横に伸ばした形で見るとありますし、北極側から地球を見て、ぐるりと回ると24時間であるという図で説明する場合があります。どちらで解いてもいいのですが、要するに、1周回ると360度で24時間であることを基本に考えてもらえれば問題が解けるということは確信しています。

【竹花委員】 それは社会科の話ですか。理科の地学ではないですか。

【指導部長】 いえ、時差の問題です。先ほど申し上げましたように、理科や社会、算数、数学は、こうしたことでみんなつながっていることを、それぞれの教科の先生に理解していただきたいということを、今回は特に言おうと思っています。

【委員長】 問題を全部見ていないので、小学校の社会科についても見てみようと思っていますが、資料2枚目に地図の問題が載っていますね。地図というものは、教わるだけでは、なかなか頭の中に入らない。現地に行ったり、親戚がいるから行くとか、そういうことだとすぐに理解できます。ですから、中学校になると、ほかの科目と同等程度になっているのは、経験の問題があるのではないかという気がします。

私は人文地理で大学入試を受けましたが、行ったこともない外国のことを聞かれても余りよく分からなかったですね。

【竹花委員】 これはなかなか難しい問題ですね。出題者は良い問題を作ったと感じる問題ですね。

【委員長】 なかなか工夫していますね。

【川淵委員】 児童・生徒が一般的に授業を受ける際に、この授業は楽しいと思って受けるのと、初めから今日はつまらないと思って授業を受けるのと、印象から言うと、社会科などは、興味を持って授業を受ける児童・生徒が少ないのではないのでしょうか。ということは、今までのこういう教え方が当たり前だと思い過ぎていないかということを知りたいです。やはり興味を持たせるために、多少知っておかなければならない最低限のこと、全体的に社会科に興味を持つような教え方を再構築するというか、今までの教え方が当たり前だと思い過ぎていきらいがあると思います。そこに問題意識を持っていかないと、教えていることが分からないです。しっかり記憶しようと言っても、初めに興味をもたないものに対して真剣に勉強する気にはなりません。マニアックな子はいますよ。鉄道の名前を全部覚えたり、都道府県を全部覚えたりしている子はいますが、ごく少ない子であって、教え方を考え直すときにきているのではないかと思います。

【委員長】 私も同じようなことを感じます。小学校社会は一段と低いですが、これはやはり教え方に問題が非常にあるのではないかと思います。出題した問題の性質にもよるかもしれませんが、教え方の問題が大きいように思います。児童をうまく引っ張り上げていかないと、成績は上がらないのではないかという気がします。

【竹花委員】 小学校の社会と理科には共通した問題があって、要は、私学の中学校入学試験に社会科や理科がない私学が少なくありません。そうすると、おのずと、

そちらの方は良くできる児童も後回しにしてしまいます。そういう傾向の顕著な現れではないかと感じます。

そういうことだとすると、どうすればいいのでしょうか。単に教え方の問題だけではなく、方法も考えなければいけません。中学校の社会科も、都立高校に入る生徒は社会科も理科も必要ですから、きちんと勉強するはずですが、小学校の社会科がこんなに悪いのは、多分そこに問題があるのでしょうか。

【委員長】 それも動機の問題かもしれませんね。

【川淵委員】 教え方に課題があるとすると、先生が悪いというような表現の仕方になってしまいますが、教科書も含めて、面白いと感じる方向にもっていかなければ、なかなか変わらないような気がします。

【委員長】 非常に象徴的な科目が理科です。平成23年度、24年度で上がってくれたので少しほっとしましたが、中学校では大きく下がっています。有馬先生は小学校を回られて理科の普及活動をされていますが、小学生は大変理科が好きであるというのが、有馬先生の持論です。しかし、中学生になると冷めてしまっただけでなくなるといった傾向があるようです。この傾向は良く出ていますね。

平成23年度、24年度と上がったのは、実験を入れたりいろいろ工夫していることの影響が相当出てきているのでしょうか。

【竹花委員】 今の問題を解決するためにはどうしたら良いのかということを考えなければならぬと思います。ここまで進めてきて小学校の社会科がというのは驚きですし、小学校でできないことが中学校でもまた関心を集めないということにもつながっているのではないかと思います。もちろん、中学校は義務教育ですから、中学生として全員迎えますが、小学校を卒業し、または中学校入学時に、児童・生徒にとって、自分が試されていると感じるものが作れないのでしょうか。だから入学させない、だから中学校に入ってクラス分けをするなどというものでは決してありませんが、これを受けると小学校卒業時の自分の学力が何となく試されて、私どもではミニマムを作りましたが、せめてこのミニマムだけはきちんと達成している、あるいは、更によくできたということがわかった上で中学校に入学する。あるいは、例えば、小学6年生の2学期の中頃に、調査のためのものではなく、児童自身に自分の学力をわ

からせるための試験を実施して、残りの期間で、できない部分を補充していってもらいます。

中学校に入学することが一つの段階としてあることが、児童にも保護者にもわかるような施策が考えられませんか。そうでもしないと、この状況は、先生の教え方だけでは解決できないのではないかという気がしてなりません。

**【指導部長】** 今、説明したものの全体として社会科と理科の総合的な数値が低くなっていますが、問題数が限られているので、出題範囲を毎年少しずつ変えているものですから、今回出題した範囲が児童・生徒にとって定着率が低かったのかもしれませんが。社会科と理科の力全部が低かったとまではまだ見えていません。ですから、特に定着度の度合いが悪いものがはっきりわかってきたら、そこをどうするかというように、個別の指導についてのアドバイスはこれからできるようになると思います。

**【川淵委員】** 「教え方が悪い」という表現が誤解を生むと思います。教え方が悪いのは先生が悪いということではなくて、教える主題、興味のもたせ方、今の教科書の在り方も含めて、思い切って、児童・生徒に合った形で、教科書も含めての教え方を変えてみることを考えるのも良いのではないかと思います。あるいは、それは、試行錯誤的に集中的にそういうことをテストしてみるとかいうことがあっても良いのではないですか。そうでないと、5年、10年たっても結局同じだと思います。そういうところまで変えないといけません。

**【竹花委員】** ミニマムをせっかく出したのですが、あれを活用しないというのはいけないと思います。こういう結果が、ミニマムについて言うならば、対象は小学5年生と中学2年生ですからもう1年あるわけですが、ミニマムを生かすためにも、小学校の卒業段階でこれだけの力がある、中学校に入るまでにできるだけ身に付けなければいけないという仕掛け作りをどこかでしないと、せっかく出しても、出したきりということになるような気がします。この学力調査をそういうものにつなげていくことが大事ではないかと思います。昨年1年見てわからなかったことが、2年実施してみてもわかったのは、やはり何か構造的な原因が社会科や理科についてはあるのではないのでしょうか。要するに、児童・生徒に動機付けを作っていない原因があるのではないかと感じますので、そこを考えることが一つあります。

もう一つは、先般、調布市立第二小学校へ視察に行きましたが、その小学校では、算数については習熟度別授業を行う部屋を設けています。どのくらい行われているのかよく聞きませんでした。小学校の段階でも、算数については一定の習熟度の対応をしていることを初めて知りました。習熟度別授業は中学校に進んでからではないかと思っていました。もし、そういうことが必要であれば、小学校段階での習熟度別授業の在り方についても、特に算数は小学校からの積み上げが中学校にそのままつながることが明確ですので、その辺の問題もどのようにするかをお考えいただければと思います。

区市町村教育委員会の中には、工夫している組織もあるのではないかと思います。そういう工夫をしている区市町村教育委員会があれば、それも教えてほしいと思うし、そういうところからは話も聞いて、良い面は全ての区市町村教育委員会に倣ってもらうことも大事だと思いますので、そういう工夫もお願いしたいと思います。

**【委員長】** 例の「ゆとり教育」のカリキュラムが施行される前の全国の学力調査が、小学校が平成6年から7年、中学校が平成7年から8年に実施されたと思いますが、それに比べて平成13年施行分については、ものすごく成績が下がりました。そのために「ゆとり教育」が大変な批判を受けることになりました。平成15年に、一部新しいカリキュラム施行の際に全国の学力調査が実施され、そのときは成績が大きく上がりました。この結果についてはほとんどのマスコミが無視しました。

そのときの印象として、ゆとり教育のカリキュラムが導入されて全体の成績が悪かった平成13年調査においても、国語の時間が一番減らされたのですが、国語の成績はほとんど変わっていません。しかし、社会科が非常に成績が下がっていたのに驚かされたことを覚えています。社会科は川淵委員がおっしゃったように、そのときの学習指導要領の構築の仕方によって随分と点数が変わってしまう傾向があるようです。その辺との関係も見べきだと思います。

面白いのは、平成16年以降はほとんどの科目で成績が上がっていることです。平成15年に成績が回復して、6年から7年、7年から8年レベルに戻りましたが、その後は、それよりも上がっているということは、大いに喜ぶべきことだと思います。小学校の社会科の問題はありますが、全体的には良い方向に行っているのではないでしょ

うか。全国の成績との相関も良く見ていただければと思います。

ほかに何かありますか。

【教育長】 委員長、よろしいですか。

【委員長】 どうぞ。

【教育長】 社会科の結果については、分野の問題もあると思います。ここに端的に出ているのは地理の分野です。歴史や政治・経済の分野まで含めて分析してみないと、わからないと思います。社会科については、明らかに昨年度に比べて10ポイントくらい落ちていますが、その原因がどこにあるのか、その辺まで分析してみないと明確なことは言えないと思います。

私も、これはおかしいと感じまして、事実、出題されたこの問題は難しいと思っています。そのようなことも含めて、もう少し分析を密にしたいと考えています。

【委員長】 是非、お願いします。私自身も調べてみますが、詳細な分析をして、それに基づいてまた議論したいと思います。

【竹花委員】 中学校の社会科の問題と小学校の社会科の問題を、私どもにいただくことはできませんか。

【教育長】 もちろんお渡しします。

【内館委員】 一つよろしいですか。

【委員長】 どうぞ。

【内館委員】 小学5年生の国語の問題ですが、これは大変答えにくいですね。いかようにも受け取れて、こういう問題がなぜ出されるのか分かりません。

例えば報告書の20ページ、「(3)適切な表現にするために推敲しようとしている。」として、「あなたは、自分の書いた文章を、どのようなことに気をつけて読み返したいと思いますか。」とあって、ア、イ、ウ、エと選択肢があります。確かにイはおかしいのですが、「一つ選び」となっていて、児童は混乱しませんか。アも、ウも、エも正しいですね。どれに丸を付けても正しいです。しかし、これはアンケートではなくてテストです。そうすると、自分はウだと思う児童はウに丸を付けるだろうし、自分はエだと思う児童はエに丸を付けるでしょう。見ると、正答は三つあるわけで、どのような意味でこういう出題がされるのでしょうか。



【指導部長】 今までの問題というのは、正答が一つしかなくて、それ以外は全て不正解になっていた問題でしたが、複数の正答があって、どれを選んでも良いのですが、自分の気持ちに一番近いものを選ぶというものです。

【内館委員】 それはアンケートであって、この場合は、ア、イ、ウ、エの中のどれですか、複数解答していいということになりません。どれか一つを選びなさいというのは、つまり、自分はどれを選びますかということですね。

【指導部長】 そうです。

【内館委員】 自分はどれですかということを、こういう学力調査の中で行うわけですか。

【指導部長】 こういう手法も取り入れています。

【委員長】 最近は多いですね。

【内館委員】 これを児童に答えさせるのは、酷だと思います。

【竹花委員】 これは、イ以外は正答でしょう。

【委員長】 そうです。正答です。

【内館委員】 「間違っているものはどれですか」という問題にすれば良いのではないですか。それなら答えやすいと思います。

また、19ページの「(2) 二つの文を一つの文に表すことができる。」も、文章が二つあって、二つの文を一つの文に書き直しなさいという問題で、79.5パーセントという結果も良いのですが、例えば0.3パーセントの「みんなで調べるときや読むときに便利だが、同じ本が3、4冊あります。」は、みんなで調べる場合は確かに便利ですが、これは余分なことではないですかという意味であつたら通じますね。上にある文章は、どうつなげなさいということは書いてないわけです。ですから、これもちょっと難しいというか、もう少し明確に児童が答えられるような形が良いと思います。間違ったら間違っただも良いのですが、国語は、特に答えが幾つもある場合があるから、これは少し違うのではないかと思いました。これで順位を付けるのは大変おかしかったです。

【指導部長】 今後、精査していきます。

【委員長】 最近、センター試験などでも、答えが一つではなく二つ、三つとい

う問題もあるようです。そういう時代になってきていますね。

【内館委員】 それは、何か良いことがあるのでしょうか。

【委員長】 今までの受験勉強は正解を一つ選べというものでした。そうではなく、ほかにも答えがあるという場合には、相当頭を使わないといけないからだと思います。

【内館委員】 ほかに正答があるのであれば、出題の仕方がおかしいのではないかと思います。

【委員長】 私は、そうは思わないですね。むしろ、自分の判断で正しいものを選びます。

【内館委員】 先ほどの20ページの問題で言うと、ア、イ、ウ、エがあって、明らかに違うものはイですね。

【委員長】 そうすると、答えが一つになりますね。

【内館委員】 一つになります。だから、自分はアだけれども、隣の子はウだろうし、向こうの子はエだろうし、どれも正しいということをおぼせるといえることですか。

【委員長】 もちろん、選ぶのは自分の判断で選ぶのですが、答えが一つではないと先ほど申し上げたように頭を使わないといけないです。そこに意味があると思います。

【内館委員】 いろいろな生き方があり、いろいろな考え方があるので、答えが一つではないという教育は必要だと思いますが、学力テストでそういう出題をすることが果たして良いのかどうか、もっと別の機会に教えられるのではないかという気がします。

【委員長】 そういう考えは確かにありますね。

【川淵委員】 それは同感です。問題のもっていき方が違っているような気がします。

【委員長】 大学受験するような年齢の子供ならならそういう判断ができるかもしれませんが、小学生だとなかなか難しいですね。わざと迷わせるというやり方もあるかもしれません。

【指導部長】 知識や技術については、おっしゃるように、これが正解、これは不正解とはっきり分かりますが、ペーパーテストで、関心・意欲・態度のような、見

童・生徒の意欲面を調査したいということで、これについては正しいことを知っているかどうかではなくて、間違った方向ではなく正しい方向でこの問題に取り組んでくれているかどうかということを見たいと考えました。評価項目に「関心・意欲・態度」と書いてありますが、そのつもりで作成している問題ですので、この問題はなかなか難しいのですが、どのようにすれば、知識・理解・技能ではなくて、関心・意欲・態度が問題としてふさわしいか、今後も検討させていただきたいと思います。

【内館委員】 今は一歩譲ってそれでよろしいですが、検討させていただきたいと存じます。

【委員長】 大学は良いとして、これが入学試験だと確かに問題があるかもしれません。これは傾向を調べることを主眼に置いているので、そういう考え方もあるのかなと私は思いました。

ほかにはよろしゅうございますか。

それでは、本件については、報告として承りましたが、いろいろな御意見が出ましたので、今後の議論に活かしていきたいと思います。

## 参 考 日 程

### (1) 教育委員会定例会の開催

12月13日(木) 午前10時

教育委員会室

【委員長】 今後の日程について、教育政策課長、よろしく申し上げます。

【教育政策課長】 次回の定例会は、12月13日木曜日、午前10時から教育委員会室で開催します。

以上です。

【委員長】 ほかに何かございますか。よろしゅうございますか。

引き続き、非公開の審議に移ります。

(午前10時53分)